

建設の碑

大河津分水の碑 その1

横田破堤記念碑

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

があった。ここは横田切れ百周年を記念して造られた公園で、すぐ前に私の背丈と同じくらいの横田破堤記念碑が建てられていた。
すでにここまで、国上山の山登りも含めて二十数キは移動しているはずだった。同行者は自転車を降りると、休憩所のベンチにグタッと座り込み、私は様子を気にしつつ、碑の方へと向った。(つづく)

弥彦山の山頂にある彌彦神社の奥の院からは、大河津分水が一望できた。足下に連なる弥彦山脈は、日本海の荒波から越後平野を守るかのようになり、徐々に標高を低くしながら海沿いを延々としており、大河津分水は信濃川の本流から別れて、山並みへ吸い込まれているかのように見えた。

あれが大河津分水なのだ。わずかに十キロの分水路が、洪水に悩まされ続けた越後平野を一大穀倉地帯へと変えたのだ。明日は必ずあそこへ行こう。でもどうやって行こうか。バスもなければ、電車もない。もちろん自家用車もない。ここ弥彦にはレンタサイクルすらない。分水路までの片道だけでも七キロはあるから、歩くのは同行者の猛反対を食らうに決まっている。でも、まあなんとかなるだろう。日本土木史上に輝くビッグプロジェクトを見つめながら、他人事のように考えていた。

翌朝、宿をお願いして娘さんの自転車を二台借りることができた。同行者も徒歩強行軍をまぬがれたせいか、スーパーカーだとか言いながら嬉しそうにしているが、私と一緒にたばかりに、どこへ行っても歩くか、自転車で移動することとなり、思えば哀れな人である。

ともあれ、宿で借りた自転車は快適で、途中、あ

の良寛さん(一七五八―一八三二)が住んでいた国上山の山腹にある五合庵に寄り道しても、予定を少しオーバーした程度で大河津分水路に到着した。分水路の河川敷は、想像していたよりもずっと広く、堤防から水路が見えないほどで、洪水時には水が押し寄せるだろうに、おおむね耕地として利用されていた。そのまま、分水路沿いを信濃川本流へ向かって進むと、本流との分水点にたどりつくが、その前に私たちは大河津分水建設の契機となった、明治二十九年の大水害「横田切れ」の堤防破堤跡へ立ち寄ることにして分水路をそれた。

それから、県道一八号線をひたすら進んだが、事前に破堤跡の詳しい場所を調べ切れなかったため、何らかの標識がないか注意しなければならなかった。しかし、子供の頃から、自転車に乗っていると楽しくてつい夢中になってしまふ。本来の目的はそっちのけで、ただただ無心にペダルをこいでいると、標識を見つけた同行者に後ろから大声で呼び止められた。完全に見過ごしたらしい。

同行者のおかげで、はるか彼方まで通り過ぎるのをまぬがれ、県道一八号とほぼ並行して流れる信濃川へと向かう横道に入ると、昔の堤防跡らしき道が続いており、上にのぼったすぐそこに小さな休憩所



横田破堤記念碑

[交通]JR越後線分水駅から徒歩約1時間。自転車なら20分。

※碑文の全文は日建連HPに掲載しています。